

水牛通信

VOL.2 NO.2
毎月1回・10日発行
定価200円

詩

ごえもん風呂 小泉英政 2

三里塚ワンパック 三里塚微生物農法の会 5

まつりのあとで 岩木 要 15

水牛雑感(続) 畑野 潤 18

〈朝鮮語〉の学び方II

大いなる〈ことば〉 李 銀子 20

楽譜

新人民軍の歌 25

ふかいなげきの日 26

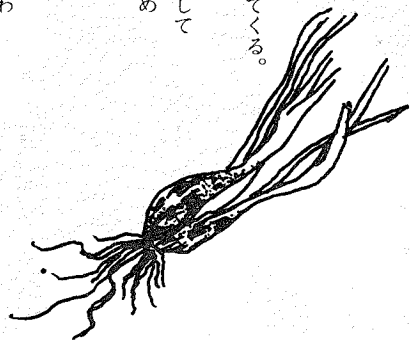
工場の灯 27

蜚語「六穴砲崇拜」を観て 金 佑宣 28

サトウキビ畑の即興劇 堀田正彦 30

ごえもん風呂

小泉 英政



もうすこし いいかたってんで
もういっぱい のんじゃうね」。
一人ぐらしの よねが
そのころ つかっていた風呂は
野天の ごえもん風呂だった。

一九七一年二月 三月の
第一次代執行

私も よねの家に やつかいになった。
闘いのない日には
私はよく薪をひき 薪をわり
よねの家の ひさしの下に
積みあげた。
よねの家の両脇に 小屋がたち
若者たちが たくさん
とまりこんだ。
飯たくかまどには いつも火が燃え
ごえもん風呂は
毎夕 煙をあげていた。

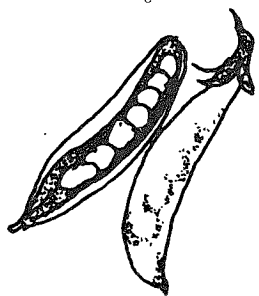
一九七一年九月二十日
第二次代執行
前日 よねは 湯につかったかな

のら仕事を終え
夜道を「てって てって」と帰ってくる。
それから
「つきよのあかりで せんたくをして
まいばん かやをひとたば まるめ
ふろに へいってよ
それから
つかれたときは
さけを いっしょう かつてくるわ
それを こっぶさ にはいずつ のむ。
そで
きょうは くだびれたから

ごえもんは ふたをかぶっていたかな
ふたの上に タルキがくずれ
すのこの上に 土壁がくずれ
ついに ごえもんが
くずれたかな。

東峰の このプレハブに
よねが移り住んで
青年行動隊は 大工らが中心になって
風呂場と便所を よねに贈った。
風呂場には
ガス釜だったか 石油釜だったかが
すえつけられたが
だれかが空炊きをして
まもなく こわれた。

「こんな ふべんなものは ねえ
やっぱり ごえもんが
いちばんだ
ごえもんは じょうぶで いい」。
いきさつは うつろだが
私はよねから
風呂づくりを たのまれた。



条件派のやしき跡から
リヤカーで
雨ざらしの ごえもんをはこび
二回ほどで 完成した。
よねは ニコツとして 喜んだ。
その風呂に
こうして

私が 毎日毎日 はいるなんて
思っても みなかつた。



あのころから
風呂場は ちつとも変らない。
私たちが 息子になったころに
ほのかに感じとった よねのにおいも
すつかり 消えて
私は三里と一人と
美代は双と湯につかる。

思っておせば
東京で銭湯につかった時期を
のぞけば
私は うまれてから ずっと
こんな風呂で
よこれをおとしていた。

赤さびがうかぶ ドラムカンの風呂も
なつかしい おもいでだ。
ドラムカンに 背中をくつつけると
やけどしそうで
小さな体を ちぢこませて
じつと はいつていた。
たしか 野天で
雪が ちらついていた。
赤々と燃えるおきを
ぼんやりと ながめながら
湯がわくのをまつ時間が 好きだ。
おきのなかに
よねがいて
仲間がいて
ひざがあたたかい
闘いが 見える。



一九八〇年一月十一日



三里塚ワンパック

三里塚微生物農法の会

三里塚ワンパックという野菜の自主流通をおこして、早や丸三年と四カ月ほどたつ。

ワンパックとは、あまりいい呼び名でないとの声も耳にするし、私たちも、そう思っているのだが、それに代わる呼び名がない。名前はどうでも、子は育つわけで、やりがいのある三年であった。

ワンパックというと、よくスーパーマーケットで、きれいにパックされている野菜を思いうかべる人が多いだろうが、実は、そういう代物とは、風貌、質において対極をなす野菜が、30×50×30の箱に、毎回十種類ほど詰めこんである。

八百屋さんの野菜とどこが違うかといえば、まず、無農薬で有機農法で育てた野菜であること。従って、見かけは悪いものもあるが、味はバツグンなこと。次に旬の野菜であること。更に、収穫したままの姿で、泥つきであるが、とても水々しい鮮度があること。手前味噌で、自慢しだせばきりがなが、三十八人から出発して、現在、千人ほどの人々が、この野菜を食べているが、そのように、成功し

た訳はといえば、味のよさが大きな比重をしめていることは確かだ。誰も、まづい顔をして、私たちの野菜につき合うことなどないのだから。

このワンパック野菜を、現在、五軒の農家の共同経営で育てている。三年前は、三軒で、その後、四軒になり、五軒となった。もちろん、六軒目をさがしている。

五軒の農家で、お互いに七反歩ずつ土地を提供し合い、合計三町五反歩がワンパックの畑となっている。その畑から年間にして、五十〜六十種類の野菜が収穫される。

畑を共有し合い、労働も共同で、収入も均等割が、大まかな原則。途中の草とりなどの仕事は、分担し合うけれど、その遅れは、全体で取り戻す。植えつけや、収穫、パックづめなど、人手のかかる作業は全体でこなす。配達には各家が一コースずつうけもち、野菜にそえて会員に手渡すピラも、五軒で交替交替で書く。そして、ある事情で、全く仕事ができないことがあっても、その配分は保証されて

いる。

ワンパックの特色は、反対同盟の農民同士が、闘いを共にすることに加えて、農作業や、生活という根っここの部分で、具体的に結びつきを強めたところにある。

始めてから、九三年と四カ月、野菜は、種類や量が、少なくなることはあっても、途絶えることなく三里塚から運ばれた。そして、その野菜とともに、ピラも、毎回毎回、白紙になることなく、よくも続いたものだ。正確には数えていないが、通算すると、だいたい八十号ぐらいになるだろう。これは、ワンパックの七不思議のベストワンになるのじゃないか。

これは、理屈ぬきだった。野菜を育てるのに、鶏糞がいるように、パック野菜を通わすのに、ピラは不可欠となった。鶏糞が野菜を育てるこやしなら、ピラは、野菜を通して、三里塚の私たちと、都市の生活者とを結ぶこやしとなった。ワンパック野菜とピラという組み合わせは、いつのまにか私たちの運動の、おかげさにはいえば、伝統となった。

ピラ当番の順番があるのだから、前もって書いておくという手もあるが、私をふくめて、全員が、ぶっつけ本番だった。パックづめが終わると、ほとんどが夕暮で、それから、翌朝の配達に発つまでの間に、「こりや大変だぞ」という感じで、書いたものだ。下書きなんてない、推敲なんてない、もろ、ボールペン原紙にらめっこして書きあげたものだ。

それにしちや、できがいいなんて、おだてないで下さいな。ここに載せたのは、ほんの、部でちゃんどボロはかくしてありますので、

塚現地を見てもらったり、短い時間ですが、生産者と消費者というわくを、とりはらいつつあるように思えます。

三里塚へ行ってみたいなど思ったつら、是非来て下さい。子供をつれて来て下さい。私たちの都合の許すかぎり、どんどん交流を深めたいと思っています。

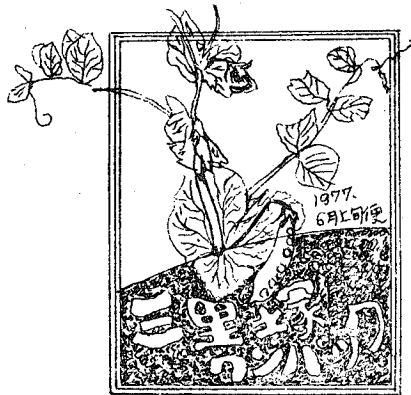
土地を守り、土地を開くこと

一九七七年十月下旬便

このワンパックの運動は、単に私たちが農法の問題として、有機農法、無農薬の農業を実行し、会員の人々に安全な野菜を届けると

いうことだけではなく、深く、農民としてどう生きたらよいか、どのように生きる為にどのような関係をつくり、その力を基礎にして、どのような闘いをつくりあげていけばよいかなどということに連なっています。

三里塚で空港建設に反対し続けている私た



ワンパック満一歳

一九七七年九月下旬便

三里塚をわたる風はもう秋です。ワンパックの中味も少しずつ秋らしさを増していきます。三里塚ワンパックの第一便ができたのが一年前の九月二十五日でした。相模原の「くらしをつくる会」との間で実験的に動きだしてから一年たちます。第一便は三十八ケースでした。

保存してあるワンパックのピラを読みなおしていると、いろいろなことが想い浮かびます。スクラップブックのページをめくると、ワンパックを通じて知り合った人々の顔が、にぎやかに浮かびます。二十八ケースから出発して、今では四七〇ケースになりました。

約四七〇人もの人々が、その家で食べる野菜のほとんどを、このワンパックでまかない、誇で三里塚を感じているということは、私たちに与った大きな支えです。

私たちの側といえば、まだ共同化をはじめて月日も浅いもので、どういう成果をうみだしたかということ、明確にまだ語れませんが、簡単に言葉にならないものとして、内なるものとして、とても大きな可能性を秘めて発酵しています。

この頃、ワンパック会員の人の、三里塚訪問が、少しずつですがふえています。援農してもらったり、交流会をもうけたり、三里

ちは、この地に空港をつくろうとする政府、空港公団の、強権的な土地収奪に、人間として当然の叫びをあげて、闘いつづけています。その方法としては、さまざまな創意をこらしながら抵抗しています。が、その根のところに、どっしりとしたものは、やはり、自分が所有し、耕しつづけている農地を守る、土地を売らないということにあります。

土地を守るといことは、たとえて言えば、自分の土地の周囲に柵をめぐらすことだと言えます。

しかしながら、柵をめぐらすには、柵をめぐらす決意に加えて、柵を維持し、強化する力が必要です。

国の決定したことに、最初から抵抗することを放棄する人、柵をめぐらす気持があっても、柵を維持する力の弱い人、さまざまな人びとの事情で運動のゆくえは左右されます。

そのような個人的な事情、個人的な決意による不安定な運動の構造を、土地を守るうえでも、闘いを太くしていくうえでも、変えていくことがとても大事なこととなっていきます。

そういう場合、土地を守る、土地を売らない、土地の周囲に柵をめぐらすということ、根本的に問いなおすことが必要とされます。個人的な事情を少しづつ、身ぢかな人々の共同の力で解決していく、個人的な決意、思想を、日常的な仕事を通じ、日常的な闘いの中から、共同でさらに肉づけしていく為にも、土地を開くということ、自分の土地の周囲にめぐらした柵を、闘う仲間同士で開きあうということが、具体的な問題として私たちのなかにあります。

仮処分が却下されるまで畑とともに眠る

一九七七年十二月下旬便

私が畑へ泊りこんで四日目の朝をむかえています。夜はとても冷えます。特に午前四時ごろからの冷えこみは、こたえます。それに加えて、公団、ガードマン、私服警官などのいやがらせがつづきます。それでも、この四日目も、朝方は雨がしとしと降りましたが、西のほうより晴れはじめ、連日、日中は暖かいです。畑の作業もとてもはかどり、まもなく、まれなる、きれいな畑になりそうです。私が泊りこんでいることは、新聞、マスコミなどですでに知られていることと思います。その理由については、もう一枚のピラに書いています。

この畑を人間にたとえれば、無実の罪で死刑台におくられようとしているところです。十一月二十九日に大豆の収穫をおわり、代って、この畑を守るのは、元気に芽をだしたそら豆の番です。

このそら豆は来年の六月ごろ、みなさんの手元に届く予定です。このそら豆とともに、私はこの畑に居続けます。いわれなき仮処分が却下されるまでよろしく御支援をお願いいたします。

十二月二日朝 小泉英政

畑の泊り込みを始めてから、野菜を買っていただいてはいる多くの方々から、激励の電報や電話をいただきました。

ワンバック共同作業を始めてから、様々な事情で、全員が作業に

まぐるしい攻防をくりひろげてきました。

ワンバックの方も、最初はワンバックに対するイメージも、仕事のやり方も、三人三様でなかなか足並がそろわず、時間的なロスがかなり出て、草とりなどずいぶんためてから、やっとやったりする有様でしたが、ポツポツときてくれるようになった会員の皆さんの援農のおかげもあって、何とかこなしてきました。

闘争と生活をどの様に両立させ、両方含めたところでの固い団結を、どのように作っていくか、その答えを求められた共同管理、共同作業ではありましたが、各家の条件の違いや、それからくる仕事に対する感覚の違いを、あまりうまく調整し得ぬままに、スケジュールをこなすのに精一杯で、前半は仕事にふりまわされているきらいもありました。

これでも、とにかく一年間、月六回の出荷を、とどこおりなくこなしてきたということが、私達に大きなおちつきを与えています。

そして今、小泉夫婦がぬけていても仕事は順調に進められ、彼等の穴をうめていることよって、一緒に畑に坐りこんでいるのと同じ位、彼等の闘いを支えているのだということが、残る他のメンバーの支えになっています。こうした関係が互いの間でできたということで、ワンバックの第一の目的は、果たされたと思います。

この一年は、家の建設で言うなら、基礎を打ち土台を固めたところでしょう。やっと整ったこの土台の上に、どんな家を建てていくかは、来年の課題です。

香り高いこの三里塚の土のように、ワンバックも、そして、私達一人一人も、豊かなひろがりをもって、成長していきたいと願います。

加われない事もありましたが、共同の力を出し合って、乗り切ってきました。今回、我が家二人が仕事に出られなくても、出荷や畑の仕事が、とどこおることなく進んでいます。仲間の方に助けられて畑を守る戦いに起ることを、本当にうれしく思います。

一日三回、畑に入るたびに、公団、ガードマンのいやがらせが絶えませんが、多くの方々の励ましが私の支えです。

自分の家のいそがしい仕事をおいて、炊き出しや、ワンバックづめを手伝って下さる人達、ワンバックの仲間、そして励まして下さるワンバック会員の皆様に、心から感謝いたします。

十二月二日夜 小泉美代

この一年をふりかえって

一九七七年十二月下旬便

早いもので、もう今年最後の便となりました。白菜がなくなつたかわり、お正月用に八ツ頭が入ります。里芋もセレベスもかわらない、コクのある味は、おせち料理の豪華な一品となることうけあいです。

この一年は、ワンバックが本格的にスタートした年でもあり、又、空港反対闘争の上からも、ずいぶんいろいろなことあった年でした。五月に鉄塔が倒され、東山さんが殺されて、夏には騒音テスト、動労のジェット燃料輸送阻止の闘い、そして開港宣言が出て、十一月末からの小泉夫婦の畑を守る闘い、岩山や横堀の要塞建設と、め

鯉のぼりは見られつかな

一九七八年四月下旬便

八十八夜のわかれ霜といわれるように、寒さの感じが遠くなります。それでも今年のように、こぶしの花と、桜の花の間がひらいている年は、暖くなるのが遅く感じられます。

三里塚にとつては、大変忙しい春をむかえることとなりましたが、一同元氣にがんばっております。

さつま芋の苗作り、さと芋、セレベス、八ツ頭の芽出し、にんじん、ねぎの植付、こかぶ、ラディッシュ、ほうれん草、なつば類の種まき、それに、とうもろこしやかぼちゃの種も蒔きました。

なす、ピーマン、ししとうがらしなどの苗も急に大きくなり、三月まめやグリーンピースも背を伸ばしはじめました。

二月に蒔きつけた小かぶがもう食べられます。ねぎの苗は三反歩に植え付けが完了し、これから、いんげんの種蒔きをするところです。五月二十日の出直し開港が予定されている頃までには、なんとか蒔きつけ計画を完了させ、各々の田植にもメドをつけなくてはなりません。

一方では「話し合い」ムードなどという風潮が流れはじめられています。国は予定の開港計画が実現できなかったと、かな切り声をあげています。しかし壊れてしまった管制塔といえどもせいぜい「物」であり、これまでの政府の強引さをもってすれば、時間と金で、そ

のうめあわせは可能となるでしょう。

ところで、壊された村、はぎとられ捨ててしまった土、もうとりかえしのつかない親子兄弟、肉親などの人のつながりにおける対立と亀裂、コンクリートの下にうめこめられた百姓の魂。これらのは、いったいどのようにすれば取り返しがつくというのでしょうか。

東峰の石井家のおじいさんの武さんは、去る三月二十六―二十七日の横堀砦のたたかいの中で逮捕され、すでに二十六日もの長い時間、不当にも拘留されつづけています。

それどころか、検察当局は、ありもしない四つもの罪名をべたべたとはりつけて、起訴しているのです。

二十一日、小雨のふり出した頃運よく面会することができました。石井さんは、開口一番、「パックのほうは大丈夫かい」と、ここにこしながら元気な声です。いく分、色が白くなつたかと思つてみると、「腰が少し痛むけど、七年前には若いし、は四カ月もがんばつた。年寄りががんばれねえはずはねえさ。でもよ、孫の鯉のぼり見られつかなあ」と。

作物と価格

一九七八年六月上旬便

政府が政治の命運をかけて、この十三年間いつだってそうしていたように、力にまかせて、このたびは「開港」という行事を強行し

たにすぎません。

一方、お百姓のほうは、六十日にもおよぶ戦いの日々があつても、たとえ一家の主人が長期の勾留を強いられていても、農作業をやめているわけにはゆきません。

つゆ入り前ともなるとさすがにほとんどの農家では田には早苗が根づき、畑も根付けられた作物の緑が次第に広がってゆきます。

「開港」と農業のあいだにはこのようにはるかな距離を感じますが、同じように、価格と作物のへだたりに気を止めないお百姓はいないように思われます。

たとえば、私たちは、じゃが芋一個の値をどのように算出するのでしよう。一個のじゃが芋を食べる人はその値の根拠をどこに求めているのでしよう。寺に切つた芋の種をまだ霜柱の立つ畑に植付けたお百姓は五月の初夏を想わせるような日にはじめてさがし当てた一つのほやほやじゃが芋にいくらの値だんをつければよいのでしようか。ぜひ、みなさん考えてみましょう。

みなさんの手もとにとどいた葉物を、よおく見てください。もしかしたら、一つぶの露が残ってはいませんか。これから暑い夏にむかひなるべく葉物がしおれないように、三里塚に朝日が昇りはじめしつとりぬれたころ、私たちは畑で仕事を始めます。

待ちに待った雨がふりました

一九七八年九月上旬便

「お盆にごぼうを掘ったところ、ごぼうの長さほど、土が乾燥していたぞ」。

「いつもは、ももまでもぐつてしまふ田んぼに、今年はバインダー(稲刈り機械)が入ったぞ」。

何十年ぶりの干ばつとやらで、顔をあわすたびに、誰もが予想もしなかつた気候にとまどい、心までがひからびそうになりながら、それでも、今日こそは、今日こそはと、見上げていた空から、ついに雨がふりました。なにが嬉しいと言つたつて、こんな嬉しいことはありません。早速、秋野菜の種まき、法蓮草、小かぶ、大根、春菊と、種まく心もうきうきです。雨々ふれふれ、雨々ふれ、今日も明日も明後日も。

染谷のおばあちゃんに励ましの手紙を

いつも元気にワンパックの野菜づめを手伝ってくれている染谷のばあちゃん、田中のばあちゃんは、二軒とも、二期工区予定地内で暮しています。

そのうち染谷のばあちゃんの家では、ばあちゃんが体の具合を悪くするほど大きい悩みがありました。

ばあちゃんがほとんど一人で開拓した土地を、今まで一緒に生活していた息子夫婦が、空港公園に土地を売って、東峰部落を去ることになったからです。その話しを聞いたのは、昨年でした。その時から、染谷のばあちゃんは、一人になつてもここを動かないと、心にきめていました。私たちのパックの仕事を手伝ってもらいはじめ

1978年 6月 14日 八王子 朝日コース

品目	量	価格
じゃが芋	1.5 kg	165
人参	8本	160
大根	3本	120
こかぶ	6コ	90
ハクサイ	500g	100
油菜	500g	100
かぶキャベツ	4コ	120
ニラ	100g	40
ひびき	100g	100
グリーンピース	200g	100
ソラ豆	550g	220
里芋の芽	200g	80
小計		1,395
運送料・運賃	+ 130	1,525
国立	+ 200	1,595

次回回は 6月 28日 です。

次回予定... じゃが芋・人参・玉ねぎ・大根・こかぶ・ラデュレ・インゲン・カラダ菜・ハク菜 等...

※ 野菜類は野菜が一度に作りすぎた分を保存できるものだけ処理するもの。23日付けはかぶの物等、うきと別して処理して下す。

※ 葉物をまくつた、さいせんの2週間以内の葉物や蒸かしの野菜類は、安全でおいしいです。

※ 運送料・運賃は、130円(100円は運送料、必要な経費(ガス代、高速代、倉庫代、運搬助の費用等)として、野菜代金(小計)と別に支払う必要があります。

※ 30円は各グループに必要な経費(連絡の費用、電話代、印刷代等)としてグループの運営費用に充てさせていただきます。

※ 例) 250gの運送料は、100円(小計)と別に支払います。

(小計+運送料)×パックの個数 = 次回のお支払い額。

※ 産地の御意見を必ずお聞かせください。お聞きします。

たのは。私たちは一人で生活するようになるばあちゃんの、生活のいくらかのたしにしてもらいたい、私たちも仕事を手伝ってもらえば、大変助かるし、そういう関係のなかで、精神的にもいくらかの支えになればと思っていました。

息子夫婦が、つい数日前に引越しをすませたそうです。その時も、息子の光重さんが、「ばあもはやく荷物をまとめる」と言っていたのですが、ばあちゃんは、きっぱりと、「どこにも動かないと言っていた」と語っていました。

息子夫婦、孫たちのいなくなった家で、ばあちゃんといじいさんの二人暮らしになってしまい、それでも、「せいせいしたよ」と気丈夫なばあちゃんです。

染谷のばあちゃんは、大木よねさんと、大の仲良しでした。「大木よねのとりの墓に埋るんだ」と、七十八才のばあちゃんは、ひたすら生活に、空港反対の闘いに、うちこんでいます。

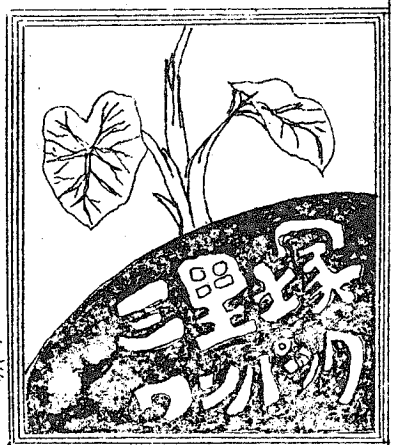
いい車だなあ！

一九七九年六月上旬便

六月一日、待ちに待った黄色いキャンターが届きました。ワンパツク会員が、毎回五十円ずつ出資することによって購入できることになったワンパツクの配送車です。頭金の約二十五万円は、三里塚側で出資しました。今後、二年間、皆さんの五十円ずつのローンでトラック代金を支払います。

回目、そのほうれん草を届けました。二回目はラディッシュ、三回目は小かぶと、届ける量も、まだ少量ですが、ずっと続けていきたいと思っています。

闘う労働者に野菜を届けるのは、闘う農民のつとめではないか。心と体が、そう思い、そう動く。野菜をとおして、また新たな顔と出合い、闘いと出合う。



1978.7A上旬便。
三里塚微生物農法の会
千葉県成田市東峰71-1小泉カ
0476-32-0425



初乗りしてみたら、緊張したり興奮したりで、初恋の人に声をかけるような、ドキドキした心もちで体がふるえまわった。

農民と都市の生活者が力を合わせて、新しい農業と暮らしを創造していく、一歩一歩その足場を組んでいくその成果が、共同出荷場の建設、そして配送車の購入と、確実になしとげられています。

三里塚の地で、力づくで建設されている空港に、わが身でもって反対し、息づく作物とともに農民の誇りをかけて、堂々と、新しい戦う農民の農業のあり方を、手さぐりで追い求めてきたことが、具体的に形や人の輪をもたせて伸びていくこのことを、多くの人々とともに喜び合いたいと思います。

今まで、ワンパツクの配送に使用していた石井新二家のキャンター、どうもおつかれさまでした。感謝！

神奈川コースでは、最近こんなことをしています。神奈川コースの途中にある協同電子労組の労働者に、野菜を無料で届けはじめました。私たちは、協同電子労組の闘いを、相模原のくらしをつくる会の人々から聞いたり、さがみ新聞で知ることができました。

協同電子労組の四十七名の人々は（パートタイマーの主婦の人々が大半を占める）、会社側の倒産攻撃にあいながらも、工場を自主管理し、労働者の当然の権利を守る闘いをおこなっています。しかも、その闘いが、とても明るく、生き活きとしている様子が紙上から伝わってきました。失業保険を分けあいながら力を合わせて闘っている人々、野菜を食べてほしい、新鮮で安全な野菜こそ、そのよくな人々の栄養となるべきだと思いました。

そのころ、ほうれん草が暖冬のために沢山できていました。第一

ワンパツクに仲間入りして

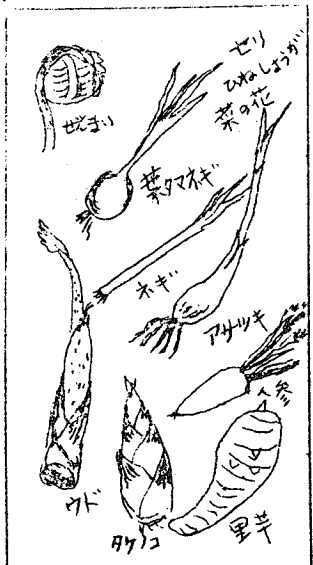
一九七九年六月下旬便

いよいよ梅雨入りですね。適当な湿りがあつてしかも高温で、作物もほきる（勢いよく成長すること）でしょうが、草の方もすぐ山になつてしまいます。田植お茶摘み等自家用の基本的食料の確保をすすめた所で、慣れないパツク詰め、共同の植付作業等に追われていると、畑の方は野菜と草の背くらべになつていきます。これからは草との長い闘いが始まります。

昨年末から予告されていましたが、六月よりワンパツクの仲間に加わりました木ノ根部落の小川です。木ノ根はご存じの方もあるかと思いますが、二期工区内のC滑走路（横風用）予定地です。

皆さんに是非来ていただきたいのですが、私の家は、おそらく反対同盟員の中でも一番飛行機が間近に見えるのではないかと思います。三・二六に管制塔を占拠した時は、じゃが芋畑からよく見えたのですが、その後開港までにあわてて作られた鉄板の壁で目かくしをされましたが、その壁一枚と向うのバリケードをはさんで、こちらには農作業、あちらは赤い巨大な尾っぽを見せてエンジンテストをしています。言葉を交そうにも聞きとれないので近頃は無言の事が多くなりました。

一年中機動隊に見張られての農作業、かえって気の張りになる位です。時には若い隊員をからかいながら。



さて私達は昨年「微生物農法の会」に入って有機肥料、無農薬の農法を始めましたがパックの中にも入ったことのある大根、午茅等の出来は全く今迄に経験したことのないものでした。どちらもネマ線虫に主根を喰いちぎられて蛸足になり、大根はどう立ちが早く、蝶々が乱舞する花畑になってしまい収量は大きく減りました。やはり化成肥料や殺虫剤等で長い間痛めつけられたこの土を、豊かな作物の採れる土にするには、相当の長い年月がかかりそうです。それでも今出している春播き大根や小蕪が、東峰のおばあちゃん達に賞められたりすると、まぐれかもしれないのに、土がよみがえって来た、あの時は息も絶えだえの状態だったに違いない、この農法を選んでよかった等と、単純に嬉しがっています。

緑のジュエータンの様になることでしょう。それにつけても、この地を飛行場にしてこの土をコンクリートの下にして殺してしまおうとは、とても考えられない許し難いことです。私達は土をよみ返らせ育てていく中で、ますます怒りが強まっていくのを覚えます。ひるがえせば、私達がどんどん土を肥やし、立派な農作物を作り、安定した農業を営み、ゆうゆうと生きていくことは、飛行場を作ろうとする人達にとって大変恐ろしいことだと思えます。

その為にも、私達は「食べる側もひつくるめた共同経営」者であり「互いの生命と暮しの一部をあずけあう日常的連帯」者である皆さんと、もともと結びついて強くなっていく必要があるし、農民の未来もその辺りに見定めたいと。少し大袈裟でしょうか。でもこう書いて来て今思い出します。農民放送塔の垂幕を「日本農民の名において収用を拒む」

それでは、永いおつきあいを、どうぞよろしくお願いいたします。

まじりのあとで

岩木 要 (川崎・石の会)

異常な長さで続いていたうっとおしい雨が、うそのようにあがり、雲ひとつない青空をみせた十月のある日曜。この日東京浜コンビナー直下の労働者居住地域「川崎・桜本の公園」で一風変わったまつりが行なわれた。まつりのタイトルは「自立をめざす地域祭」。

昼すぎ、三里塚からもちこまれた風車が会場となった五〇〇平方メートル余りの児童公園を見守るようにゆつくりとまわりだして、まつりが次第に始まってゆく。鉄パイプで会場の囲りに組まれた「出店」では京浜地域で各々の課題を掲げて活動してきたグループが、趣向をこらして祭にきた人々にアピールする。

針灸治療や健康相談のコーナーでは真剣な眼差しで治療を見守る。血圧測定には行列ができる。無農薬野菜の人気も上々、人手不足をみかねて手伝いにかけてでる人もいる。反公害のパネル展は川崎に新設されようとしているLNG基地の恐ろしさを訴える。三里塚農民の写真展はなかなかの迫力である。紙芝居もやっている子供達の広場は一番にぎやかだ。沖縄のコーナーではCTS基地を紹介、ここで売られたパン(サータアンダギー)は特別おいしいものだ。ハンドマイクで熱心に呼びかけをするのは自分達の共同作業所をつくったばかりの脳性マヒ(障害者)の人達で

ある。そして在日韓国人の青年写真家による外国人登録証用の写真撮影場では、静かに在日朝鮮・韓国人の法的不条理をつきだす。時おり、会場中央に設けられた小舞台の前で若い女性弁士が童話の朗読をする。子供たちは食い入るように話に聞き入る。

陽がおちかかる頃、まつりは後半の部となり中央の小舞台を中心に次々と出しものごとびだしてくる。出しものの紹介役「日雇労働者に扮した二人の狂言まわしは、「黒テント」の人達からの特別の(?)演技指導をうけただけあってなかなか達者な立ちまわりで、終始人々の笑いをさそった。朝鮮の民族音楽、朝鮮語学習のための紙人形芝居にはじまり、反公害の怒りに満ちた悪徳市長糾弾の芝居には拍手喝采。労働者のための空手紹介では見ごたえある演武と、試し割りでは予定外の飛び入りもでる。また三里塚闘争のフィルムを背にした被解雇者の語りもあった。日がとっぷり暮れて、最後に沖縄青年による躍動感あふれるエイサーとカチャーンをみんなで踊ってフィナーレとなるまで、参加者にこの一風変わったまつりを満喫してもらったのである。

のべ数百人の住民の参加、常時百余名の滞

留、野菜売上げ七万円、針治療者30名等の規模は主催者側で予測していた最低の線をなんとかこえたものである。共産党の妨害宣伝のことを考えれば、最初にはまずまずである。予定開始時刻に十分な準備ができなかったことや、住民参加者がもう一まわりほしかったことなど、いくつかの反省点があるが、残しながらも、自立をめざす、まつりは今後に残しうる小さな手応えを得たと思う。

(1) 表現能力の拡大、多様化をめざす

政治意志の伝達（大衆への呼びかけ、働きかけ）がおおむね「ピラマキ」「集会」「デモ」というパターンに終始してきた。これにかかわる言葉と行動の組み合わせは、確かに一定の有効な表現系となってきただろう。だが、それはあまりにも味気ないものになっているのではないか。民衆の感性と縁遠くなっているのではないか。現状の表現能力の狭隘さに満足できない衝動が、我々に今回の「まつり」を思いつかせた。

いる。

(2) 異質なものが対等にまじりあう

通常、ひとつの行動、ひとつのスローガンを決定するのに我々は必要以上に長い退屈な議論をしてこなかったか。必要以上というのは、議論だけでは埋めることができない相互の差異を形式的にでも一致させなければ共同できないという信念を満足させるために払われてきた努力のことである。具体的根拠と固有の歴史をもつ異なる運動体が議論だけで互いに完全に理解しあうことはもともと不可能なことだ。むしろ、異質であるお互いを対等に尊重し認めあうことから本当の理解が始まり、互いによい刺激を与えあうことができるだろう。今回のまつりの準備でも我々もまつりと「自立」とか「地域運動」とかについて議論しなかったが、それよりもなにより優先したのは、いろんな人々が自分達の個性をひとつの場に存分につけあえる環境を作ることであった。実際この祭を通して、多くの人々と初めて知りあうことができた。これ自身大きな成果だ。まつりに限らず我々の思いは、自由な空気の中で屈託なくお互いを批判し、信頼、支持しあえる協働関係を深め拡げてゆ

安易に考えれば、大衆うけしなない難解なアジテーションよりおもしろいことをやった方が受けるにきまつている。問題はソフトに働きかけることがラジカルなものに背を向けることになるのではないかとという危惧である。しかし、このことはほとんど紀愛にすぎないという思いを祭のあとで一層深めた。ソフトか、ラジカルかの二元論ではなく、ラジカルなものもいかに多面的に表現し、多様な大衆的感性と響きあわせるのかという問題である。

風刺のきいた芝居は、百のアジ演説よりももっと根深く人々の心をゆさぶることもできると予感させたし、歌、おどりは解放への衝動を突き動かす確かなリズムとなる。針、空手は身体を呪縛してきた因習から人々を解き放つ有効な武器たりうる。写真、絵、語り、食べ物、遊びも、各々に固有な方法で人々に変革を語りかけることができることを証明した。

これは、政治参加への便宜上の手段ではない。これらのひとつひとつが重要な意味ある変革をはらむものである。知的感性を偏重してきた抽象的表現系に代って、人間の五感すべてに訴える豊饒な政治的感性、具体的表現系をより発展させることが大切になってきて

くところにある。

(3) 自立をめざす……

「まつり」を企画した直接のキッカケは三里塚の風車であった。農民の自立魂が風車に象徴されているとすれば、我々都市労働者はどうしたら「自立」を具体化することができるだろうか。確かに生産手段をもたない我々にとって、自主管理闘争を別にすれば、このテーマはより文化、生活上のことにかたよってイメージされるかもしれない。だが、既成の秩序、諸サービス制度に依存せず自分達の力と創意で、小さくても何か実際のものを協働で生み出せたとしたら、その自信はもつと大きな「自立」の可能性をみさせてくれるだろう。

健康、食品、公害、差別、労働、教育、親睦……いろんなことが労働者住民の内発的意志と主体的参加のもとで討議され、協働で解決されてゆく。そうした自立した共同空間を地域の中にうちたてたい（狭い地域内に自己充足したものでなく）というのが我々の希望である。今回のまつりはこの意味での地域の人々へのメッセージでもあった。





水牛 雑感(続)

畑野 潤

水牛のあの立派なツノも、地域によって形や大きさがかなりちがっている。たとえば湿潤熱帯のインドネシアで見る水牛は、ツノが比較的まるみをおびていて、あまり長くなく、その姿にはやや女性的な趣きがある。半湿潤熱帯のタイで見る水牛は、三角に角ばった大きなツノがよく写真で見ると頭の左右に形よく張り出していて、男性的な力強さがみなぎっている。乾燥地帯を流れるナイル川流域などで見る水牛は、比較的に角ばったツノが後向きにのびていて、いかにも遠慮ぶかいといった風情がある。おそらくは、それぞれの地域の気候風土や用途などに応じて品種の選択・改良がおこなわれてきたものであろう。

他の動物にさきがけて頭脳を発達させ、文明を獲得した人類は、いく種類かの動物を馴らして家畜化することによって、労働や運搬などの役用に使ったり、食用にしたり、あるいは狩猟用や愛玩用などに利用してきた。一方、家畜化された動物の方では、動物のなかで最強の力をもつにいたったヒトに従属し、ヒトのために奉仕することによって、餌を安定的に確保したり、肉食獣などの強敵から守ってもらっているのだ。家畜は一面ではヒトが勝手にその動物の運命を左右し、利用しているのだが、別の見方をすれば、

両者は共存・共生の関係にあると見ることもできよう。

野性の動物とは家畜のようにヒトに依存することなく、自然の状態で生きる動物のことである。かれこれもう十年ほど前のことになろうか。上野動物園飼育課長の中川志郎氏(現多摩動物公園勤務)が動物園で飼われて見世物とされている野性の動物の飼育条件に関連して、アニマル・ミニマムについて月刊雑誌に論文を発表したことがある。当時は美濃部都知事のミノ笠の下でシビル・ミニマムという言葉遊びがさかんにおこなわれていた時代である。シビル・ミニマムとは、市民が市民として生きるための最低条件」のことを意味する。アニマル・ミニマムとは同様に「野性の動物が野性の動物として生きるための最低条件」のことを意味する。中川氏のアニマル・ミニマム論の骨子はこうだ。

一、野性の動物は、自分で餌(草木や他の動物)を探しあるいは捕えて食べるのである。動物園内のようにじっとしたままヒトから餌を与えられて食欲を満足させているのは、本来の食餌のとり方ではない。二、動物は、生殖の相手となる雌あるいは雄を、ライバルを退けながら自分で選ぶ(獲得する)。第三者(ヒト)から相手をあてがわれるのは動物本来の生き方ではない。三、動物は、

自分の住まいや餌場を侵入者から守ったり、自分の生命を守るための警戒本能をもっている。外敵の攻撃を第三者(ヒト)によって防いでもらうのは動物本来のあり方ではない。動物園に飼われている動物たちは、このアニマル・ミニマムを否定されているのだから、それを少しでも取り返せるよう飼育環境にできるだけ自然を取り入れていきたい……云々。

家畜は、まさにアニマル・ミニマムの否定のうえにはじめて地球上に存続することを許されている人為的な環境下の動物たちである。だが、同じ家畜とはいっても、大陸の広大な草原に放牧している牛や羊などと、日本の畜産業のように、狭い空間にぎゅうぎゅう詰めこみ、高タンパクの濃厚飼料を毎日無理矢理食わせてインスタントに太らせている牛や豚とは、月とスッポンほどの条件がちがっている。家畜はたしかにヒトのために奉仕し、あるいは食われるために存在している動物である。だが、家畜も動物の仲間である以上、野性の動物にアニマル・ミニマムがあると同様、家畜にも家畜ミニマムがあるはずなのだ。

たとえば、反すう動物である牛や水牛には胃が四つある。その仕組みは複雑なので一言で説明することができないが、要するに第一番目の胃の中に生息している細菌や原虫などはたらきを利用して食べたものを栄養に転化してゆく独特の消化機構なのである。この消化の仕組みが正常にはたらくためには、草や藁などの粗飼料が十分に与えられなければならない。ところが最近ではその粗飼料の入手がむずかしいところへもってきて、輸入品の濃厚飼料がいくらでも手に入るので、勢い粗飼料不足のまま高タンパ

クの濃厚飼料を多投することになる。この結果、牛の第一胃が異常発酵を起こしたり、かいようになったり、あるいは乳牛の第四胃が変位したりする病気が多発しているのである。豚や鶏も大同小異の状況下にある。この国では野性動物のアニマル・ミニマムは無論のこと、ヒトが自分の手で飼育している家畜にたいする家畜ミニマムすらふみにじっているのである。

ところで、シビル・ミニマムとは、市民一人につき量何量とか五〇メートル単位に街の中に小公園を一つとかいったもので、いわばマイホーム主義の最先端をゆくものであった。それはどちらかといえば、アニマル・ミニマムよりも家畜ミニマムに近いといえよう。なぜなら、そこには自分で餌を探し求める自由への欲求もなければ、体制に飼い馴らされた核家族社会や男性支配下の私有財産制を基盤とする現在の一夫一婦制にたいする批判精神もないからである。家畜のための家畜ミニマムの必要は声を大にして叫ばなければならない。しかし人間にとっては家畜ミニマムの延長線上にあるシビル・ミニマムよりも、むしろアニマル・ミニマムに似た生存への欲求こそが必要なのではあるまいか。そして管理社会と物神崇拜を否定するエネルギーはこのあたりから出てくるのではなからうか。

最近、東南アジアにも農耕用のトラクターが進出し、水牛を追放しつつある地方が出てきている。ボルネオ島の一角では、水牛を肉用として飼育しはじめたところもあるという。わたしは、あの野性味あふれる水牛が、この国のような運命にさらされることのないよう強く望んでやまない。

綴字表

母音字 子音字	ㅏ	ㅑ	ㅓ	ㅕ	ㅗ	ㅛ	ㅜ	ㅠ	ㅡ	ㅣ
ㄱ k, g	가 ka/カ	갸 kja/キヤ	거 ko/コ	겨 kjo/キョ	교 ko/コ	교 kjo/キョ	구 ku/ク	규 kju/キユ	구 ku/ク	기 ki/キ
ㄴ n	나 na/ナ	냐 nja/ニヤ	너 no/ノ	녀 njo/ニョ	노 no/ノ	노 njo/ニョ	누 nu/ヌ	뉴 nju/ニユ	누 nu/ヌ	니 ni/ニ
ㄷ t, d	다 ta/タ	댜 tja/テイヤ	더 to/ト	더 tjo/テイョ	도 to/ト	도 tjo/テイョ	두 tu/トゥ	듀 tju/テイユ	두 tu/トゥ	디 ti/ティ
ㄹ r	라 ra/ラ	랴 rja/リヤ	러 ro/ロ	려 rjo/リョ	로 ro/ロ	로 rjo/リョ	루 ru/ル	류 rju/リュ	루 ru/ル	리 ri/リ
ㅁ m	마 ma/マ	먀 mja/ミヤ	머 mo/モ	며 mjo/ミョ	모 mo/モ	모 mjo/ミョ	무 mu/ム	뮤 mju/ミュ	무 mu/ム	미 mi/ミ
ㅂ p, b	바 pa/バ	뵤 pja/ビヤ	버 po/ポ	벼 pjo/ビョ	보 po/ポ	보 pjo/ビョ	부 pu/ブ	뷰 pju/ビユ	부 pu/ブ	비 pi/ピ
ㅅ s	사 sa/サ	샤 ja/シャ	서 so/ソ	셔 sjö/ショ	소 so/ソ	소 sjö/ショ	수 su/ス	슈 ju/シュ	수 su/ス	시 ji/シ
ㅇ 0	아 a/ア	야 ja/ヤ	어 o/オ	여 jo/ヨ	오 o/オ	오 jo/ヨ	우 u/ウ	유 ju/ユ	우 u/ウ	이 i/イ
ㅈ tʃ, dʒ	자 tʃa/チャ	쟈 tʃja/チャ	저 tʃo/チャ	져 tʃjo/チャ	조 tʃo/チャ	조 tʃjo/チャ	주 tʃu/チュ	쥬 tʃju/チュ	주 tʃu/チュ	지 tʃi/チ
ㅊ tʃʰ	차 tʃʰa/チャ	챤 tʃʰja/チャ	처 tʃʰo/チャ	쳐 tʃʰjo/チャ	초 tʃʰo/チャ	초 tʃʰjo/チャ	추 tʃʰu/チュ	쥬 tʃʰju/チュ	추 tʃʰu/チュ	치 tʃʰi/チ
ㅋ kʰ	카 kʰa/カ	갸 kʰja/キヤ	커 kʰo/コ	겨 kʰjo/キョ	교 kʰo/コ	교 kʰjo/キョ	구 kʰu/ク	규 kʰju/キユ	구 kʰu/ク	기 kʰi/キ
ㅌ tʰ	타 tʰa/タ	댜 tʰja/テイヤ	터 tʰo/ト	더 tʰjo/テイョ	토 tʰo/ト	토 tʰjo/テイョ	투 tʰu/トゥ	듀 tʰju/テイユ	투 tʰu/トゥ	티 tʰi/ティ
ㅍ pʰ	파 pʰa/パ	뵤 pʰja/ビヤ	퍼 pʰo/ポ	벼 pʰjo/ビョ	포 pʰo/ポ	포 pʰjo/ビョ	푸 pʰu/プ	뷰 pʰju/ビユ	푸 pʰu/プ	피 pi/ピ
ㅎ h	하 ha/ハ	햐 hja/ヒヤ	허 ho/ホ	혀 hjo/ヒョ	호 ho/ホ	호 hjo/ヒョ	후 hu/フ	휴 hju/ヒユ	후 hu/フ	히 hi/ヒ

塚本 勲「速修朝鮮語会話」より

では、表の三要素は、どのようにして基本八文字をつくったのであろうか。表を組みあわせてみよう。つまり、

地「ㄴ」の上に天「ㅏ」がある ↓ 「ㄴㅏ」
地「ㄴ」の下に天「ㅑ」がある ↓ 「ㄴㅑ」
人「ㅏ」の隣りに「ㅑ」がある ↓ 「ㅏㅑ」、
「ㅑㅏ」となる。

どこか、易の卦と似ている母音は「ㄴㅏ」と「ㄴㅑ」を軸に、上と右側に画のある「ㅏㅏ」、「ㅑㅑ」を陽母音系列、下と左側に画のある「ㅑㅏ」、「ㅏㅑ」を陰母音系列とし、これらはそのつど調和し、対立しあう性質をもつ。現在使われている母音は二十一字。これは、基本の八文字を基にできあがったものたちである。

ㅏ (a) ㅑ (ja)
ㅓ (o) ㅕ (jo)
ㅗ (w) ㅛ (i)
ㅜ (e) ㅠ (je)
ㅡ (wi) ㅣ (wa)
ㅏ (wae) ㅑ (wae)

(「ハングル」)は、前にも述べたように、子音と母音がそれぞれ組みあわさることにより一音節として成立するのであるが、では、終声に入る前に、これらの子音、母音がどのように組みあわさるのか、また表にまとめておくことにしよう。

十三ページの表でおわかりのように、左に子音、右に母音を置いて文字とし、子音がはじめに音となり、ついで母音が口の形をあらわして一音を発する。

例 가 (ka) ↓ はじめに ㅏ (k) の音を口の中で出し、それを ㅏ (a) と合致して (ka) の音を発する。

この単純な音に終声を加え、舌をかんだり巻いたり、口唇を閉じたり、開いたりして、音をより豊富にさせる。

○ 終声復用初声

すこしややこしく思われるかもしれないがもう少し論を進めてみよう。

前述の「解例本」によれば、終声は、
ㅏ (p), ㅑ (m), ㅓ (s), ㅕ (t), ㅗ (n)
の八文字であると規定しているが、すべての初声は終声になることができる。

喉音	ㄱ	ㅋ	ㆁ	ㄴ	ㄷ	ㅌ	ㄹ	ㅁ	ㅂ	ㅅ	ㅈ	ㅊ	ㅍ	ㅎ
鼻音								ㅇ						
巻舌音														

○印は、その単元の代表者
終声は「ㄴ」などもいい、これは「ㄴ」などのやわらかい音と重なったとき、矢印の音に変化しやわらかくなる。

また、終声の音の種類は、大きくは三つで、この三音は、さらに三種類の音質に分れる。

III 諺文からハングルへ

このようにして編まれた「訓民正音」は、当時「龍飛御天歌」や「月印千江之曲」など、仏教書や国訳本を刊行するなどして、その普

新人民軍の歌 (フリピョン)

しん人民軍は人民をい気の武器をかくめいの軍
たいむかうをその手でまもる 党の指導のもとに立たり
いは前進する かくめいの旗は新人民軍につど
うあかほたをうろふれ たたかいはなを つ
すとあまもつ かくめいやくれましあ
めいをすすめよ 勝利の日まで

新人民軍の歌
新人民軍は人民大衆の武器
革命の軍隊
自由をその手でまもる
党の指導のもとにたたかいは前進する
革命の戦士は
新人民軍につどよう
赤旗をうちふれ たたかいの旗を
槍と鎌もつ かがやく歴史
赤旗をうちふれ たたかいの旗を
革命をすすめよ 勝利の日まで

VI 大いなる(ことば)

及につとめたが、文字生活を(漢字)が支配していたため、それは「諺文」つまり「俗なる文字」と呼ばれ、学者や両班たちには、漢字の音読みとして使用されるばかりで、日本語の「カナ」がそうであったように、はじめは官女や士大夫の婦女子にひろまった。

しかし、「諺文」と呼ばれたこの文字が、「ハングル(唯一のことば)」として朝鮮半島に定着したのは、十九〜二十世紀で、これは近代のはじまりとともに、日本の植民地支配を受ける時期と重なる。

一説によれば、「諺文」から「ハングル」と呼ばれるようになった由縁はこうである。

《朝鮮語》で、数をかぞえる場合「ひとつ」は「ハナ」といい、「ハナ」は、量詞と一緒になると「ハン」に変わる。また、「グル」は「文字」という意味のことば。

つまり(ハングル)とは、「朝鮮半島に一つしかない大いなることば」という意味である。かつての「二重言語」から「言文一致」を成しとげた(ハングル)は、日本の植民地政策、根こそぎの同化政策に抗する力の結晶ともなったのである。

韓国の有力日刊紙東亜日報は、一九七七年九月十日、祖国統一院の発表による「祖国分断三十年の間に、民族の異質化」が進んでいる、という警告を大々的にとりあげ、政治、社会生活、教育、言語等々のこまかな分析のせたことがある。

《ことば》についていうならば、たとえばづり字がちがっていたり、同一の単語がまったく異なる概念をあらわすなど、そのちがいは顕著にあらわれているという。

すべてのことばには生命があり、ことばには、その時代や社会生活などがふかく刻まれるため、用いられる場所によって、同じことばが異なる意味を生じさせる、とはよくいわれらるることだが、本来、民衆が自分たちの胸のうちをたやすく、自由にあらわすことができるようにとの願いこめてつくられた(文字)は、《ことば》は、何かの意図で人工的に規制されたり、政治的にゆがめられたりしてはならないはずである。

そう思ったとき、私はふとオモニたちのことを思い浮べた。

オモニたちは、(在日)生活五十年あまりの間に、(朝鮮語)と(日本語)がチャンピオンになった。

標準語を美しいと思う意識からすれば、そのことばは、あまり美しいとはいえないかもしれないが、(ことば)が生きているなあ、と思うのである。

たとえば、オモニの愛用する電話帳の芳名欄には、たまたましいい(ハングル)が大小さまざまにつづられているし、日本人ならば七十歳でもらえる無料バス乗車券も、自分たちはもらえないということをよく知っている。

(在日)の共同意識なるものが、しだいにうすまってきているというその中であって、オモニたちはどちらの標準語からも自由な、自分たちの魂をこめ身につけた《ことば》で、日々の喜怒哀楽を大らかに感じとっている。

どの《朝鮮語》が、正当で本物であるとはいえないと思う。

しかし、(ことば)が、本来の意味をとりかえし、自分自身の魂を共鳴させるものとして獲得したとき(ことば)は美しいとか醜いとかをこえ、同一の地平で心を通わせることができる、と私は思う。

主要参考文献
『ハングルの特性と誇り』
『韓国語の歴史』(大修館書店) 李基文著

공장의 불빛 工場の灯 (韓国)

Handwritten musical score for '공장의 불빛' (Factory Lights) in 3/4 time. The score consists of five staves with Korean lyrics and chord symbols (F, C, F7, Bb, Bb6, A-, D-, G-7, C, F, C7, A-, G-, F7, Bb, C7, F). The lyrics describe the harsh conditions of a factory and the workers' struggles.

ふかいなげきの日 (7/11/60)



Handwritten musical score for 'ふかいなげきの日' (The Day of the Deep Sorrow) in 3/4 time. The score consists of five staves with Japanese lyrics and chord symbols (D, B-, F#-, G, G-, D, E-, A7, D, E-, E7, A7, E-, A7, D, B-, E-, A7, D). The lyrics describe the tragedy of the atomic bombing of Nagasaki.

工場の灯
きれいにひかる灯
ゆくあてもなく
かぼそい作業灯だけ
これじゃかえれない
ふるさとの村
さむい夜ふけ
ここもまたふるさと

韓国の紡織工場の女子労働者のたたかいたえがいたミュージカル「工場の灯」の主題歌(台本は「水牛新聞」5号にのっている)。
ウエスタン風リズムにのつてうたわれる。
このミュージカルは、二月十七日(日)日本音楽協議会「はたらくものの音楽祭」で上演される(東京都勤労福祉会館)。
オリジナル・テープと楽譜は韓国問題キリスト者緊急会議(東京都新宿区西早稲田二一三一八—三二 電話二〇二—〇五四一)へ申しこめば入手することができる。テープは千五百円、楽譜は二千元。上演時間三十四分。

ふかいなげきの日
ふかいなげきの日よ
やみにとざされ
祖国のためにたおれた
同志をいたむ
道は血と犠牲の
泥にみちて
われらはたたかいひきつぐ
勝利の日まで

警官のなげた爆弾で殺された十五歳の活動家フランシス・サンティリヤノをいたんでつくられた歌。それ以来、軍隊や警察に殺された人たちをいたむ集会には、いつもうたわれるようになった。

蜚語「六穴砲崇拜」を觀て

金^{キム} 佑^{ウツ}宣^{ソン}

火種プロダクション制作、金芝河の詩によるコンポジション・幻燈による第三回作品『蜚語——六穴砲崇拜——』を觀た。なぜかブレヒトを思い出した。そして彼の代表作のひとつである『第三帝国の恐怖と貧困』(ナチスが着々とそのプランを遂行しつつあった第三国内での日常的な事件を、異化の目でみた二十数シーンで構成された叙事的演劇)の三分の一だけ觀せられて終わってしまったような、そんな欲求不満を感じた。この物足りなさはなぜなのか考えてみた。そして私自身の独断めいた考えを言えば、火種プロのメッセージ「私たちは詩人金芝河の抵抗の姿勢と作品に自らを問ひ、芸術もまた時代変革の担い手でありたいと願っています」(後略、『蜚語』宣伝用チラシより)とあるような金芝河の抵抗の姿勢がトータルなイメージとして作品から伝わってこない。それは、この作品の出来不出来が大きな原因ではないように思われる。

つまり、金芝河という人間が、譚詩『蜚語』一編だけでは、どうして語りつくせぬように、火種プロダクションによる人間解放の場に立ったたかう芸術のあり方——芸術の新しい草の根運動も、決して『蜚語』一作で語り尽くされるものではない。言いかえるなら

てはならないのではなからうか。

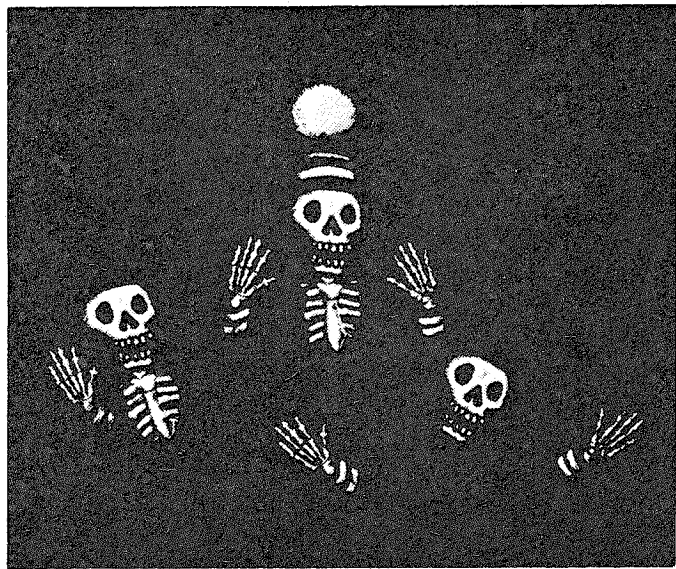
私が、金芝河の作品と姿勢を通じて、いつも感じることは、「土着的なもの」という概念である。私たちはつい最近まで「土着的なもの」の対立概念として「世界的なもの」を想定してきた。そして、「土着的なもの」は偏狭なナシヨナリズム(民族主義)に基づくものであり、私たちの芸術が「世界的なもの」となるためには、国際社会へどんどん進出し、内容・形式ともに世界的でなければならぬと考えていた。しかし金芝河の作品における「土着的なもの」とは、そういうものではなかった。彼は、「土着的なもの」を支えるナシヨナリズムとは、民族が直面している歴史的な状況に、もつとも柔軟性をもって対応していく概念であり、民族全体の歴史の転換期のその瞬間、その瞬間にもつとも適確なナシヨナリズムが理論的にも、実践的にも構成されなければならないと考えている。

過去に私たちは、日帝植民地時代のナシヨナリズム、解放後分断を強いられた時代のナシヨナリズムを経験し、そしていま、南北分断の悲劇を止揚し、統一へ向かう時代のナシヨナリズムの定立が求められている。そして金芝河こそが彼の作品と抵抗姿勢をもって、この定立に挑んでいる。彼の作品を脈々と流れる「土着的なもの」とは、このことをさしているのだろう。言いかえるならば、植民地政策・分断政策によって強要された偽りの近代化のなかで、でっちあげられた民族文化を清算し、われわれ自身の民族的伝統をどのようにに復元させていくことができるかというところに金芝河の作品の真価があるのである。

そして、そのことがただ、われわれの「土着的なもの」の問題と

ば、この第三回作品ひとつ觀ただけで、作り手と受け手の新しい連帯の場が生まれ、完成されるものではない。『しばらくた手の祈り』(第一回作品)・「めしは天」(第二回作品)・『蜚語』(第三回作品)、そして当然創作されるべきである第四、第五等々の作品の新しい流れを通して、「芸術の新しい草の根運動」は、ともにたたかう新しい連帯の場を獲得し、その中から芸術のあり方を模索し続け、発展し飛躍してゆくのだと思う。そう考えると私には、これらの作品は当然三作品一挙に上映運動にかけられるべきだと思われた。たとえ十作品創作されようが、一挙に上映すべきだという原則はかわらない。しかし、ブレヒトの『第三帝国』が反ナチス運動の状況・対象・規模の変化に対応してそのつど二十数シーンのうちから、いろいろと場面を選択して上演運動を続けたように、この火種プロによる力強い芸術運動にはそういった方法も可能なのではないだろうか。あくまでも観客にとつて必要なものは、金芝河の全体像と彼のおかれている状況のトータルなイメージであり、かつまたこの八十年代の流れを変えようとする火種プロの芸術運動の模索とたたかい、そして発展の路程である。金芝河の一作品の紹介そのものが目的であつ

してだけではなく、われわれが創造しなければならない「世界的なもの」の問題として自覚されるとき、われわれが、これをどのようにに芸術運動化することができるかという問題は、けつして簡単なものではないだろう。



サトウキビ畑の即興劇

堀田正彦

四、ホテル

P 先生は高校の英語の教師だ。
シエークスピアを、この島の方言に翻訳したいという夢を抱いている。やはりサトウキビ産産を唯一の産業とする小さな町で教鞭をとっている。

先生とは、二カ月前に、マニラで行なわれた夏期演劇ワークショップで知り合いになった。四月と五月の夏休みを利用して、六週間の「芝居の書き方コース」に参加し、学び、自分の学校の演劇部の指導にあたろうというのが先生の目的だった。参加費用は学校持ち。

「でなきゃ、とても参加できませんよ。」
先生は、すこしまぶしそうな顔でそういつた。島から一人息子を連れてきていた。

渡航費、滞在費、参加費をまとめれば八百ペソぐらいになる。日本円で約二万八千円。先生の給料は、現在九百ペソとちよつと。もうすぐ次の子供が生まれるし、とても自費では参加できない。学校持ちだとしても節約しなければならぬ。そこで、つてをたどつて、ぼくが泊つていたある学校の学生寮に潜り込んできたのだ。すぐビール友だちになった。ある休みの日、先生とぼくはマニラ市内の一流ホテルのロビーにいた。これから先生がモノしようとしている戯曲

の参考のために、一流ホテルを見学しようというのだ。外国人のぼくが案内役をかつて出たというわけ。だが、ホテルの前で、

「ドアボーイが、あんな立派な制服を着てますよ。大丈夫かな？」
と先生がいう。いわれてみれば、ぼくは洗いたてとはいえGパンとワイシャツ。先生もよそいきの格好をしているとはいへ、どう見てもボーイの純白の制服の方が仕立ても値段もずつと良さそうである。

「大丈夫ですよ。気楽に、気楽に」
と、カラ元気先生を励まして、
「ヨッノ ヤアッノ」
と、田中某風にドアボーイに声をかけて、とかくロビーに入り込んだ次第だった。

ロビーはヒンヤリと冷房が行き渡り、ギリシア風の円柱がそびえ立っている。かつて、「マレーの虎」山下奉文が総司令部にし、マックアーサーが本部にしていたという由緒あるホテルだ。先生は、一歩足を踏み入れて呆然とし、カチカチになつてしまった。

手近のテーブルに先生を坐らせ、ビールを頼んだ。ここでも、なんとなしに「ヨッノ ヤアッノ」と田中某風の仕草になつてしまふ。日本人の旅行団が画一的に見えるのは、この

心理状態のせいではないか、などとあらぬことを考えてしまった。

「ビール、いくらです？」と先生。

「一本七ペソ（二百円ぐらい）……」

「アッ……」

先生は、ますます呆然としてしまった。普段、われわれがビヤホールで飲むビールは、一ペソ五〇。高いところで三ペソぐらいである。しばらく、ビールの金色の泡をジッと見ていた先生は、グビッと一口、思い切つたように口に含むと、低い声でしゃべり始めた。
「七ペソといえば、私の村の男たちが稼ぐ日当と同じですよ。このビール一杯が、あの男たちの一日分の汗と同じだなんて……」

「……おとしでしたか、隣人の子供が木から落ちましたね。家に金を借りに来ました。治療費です。というより薬代です。診察は無料だけど、医者は処方箋をくれるだけ。薬は自分で買わなきゃならない。無料だから診察も良い加減。……家には貸してやれるお金はなかつた。その子は、三日ほど苦しんで死にました」

「隣人たちで、町まで行きましてね。街角に立ってお金を集めました。……お棺を買うためのね」

ぼくたちは、大方のビールを飲み残したまま、早々にホテルを出た。

五、サカダ

P 先生がその時語つた（私の村の男たち）が、「実践教室」にやつてきた。

二人のサトウキビ労働者と一人の組合活動家だった。その夜は、彼らからサトウキビ農場の話の聞くという時間が組み込まれていたのだ。参加者のほとんどは、多かれ少なかれサトウキビと関わっている。この交歓会は都市の人間たちのために、地元が準備したものであった。

サトウキビ労働がどんなものなのか、二人の農民がトツトツと語る。

「八十キロはあるなあ。刈り取つたキビをジュート袋に詰めたやつだ。そいつを、畑からトラックまで運ぶ。十四ぐらいのガキが、押しつぶされもしねえで、よく運ぶもんだ。おとななら一日に百袋以上は運ぶかな。なにしろ、一袋かついでたつたの九センチポにしかなんねえもん……」

九センチポといえば、二円七十銭である。ぼくともう一人のヘビースモーカーが、顔を

見合わせる。

（いま喫っているタバコが、一本二十五セントポ……。八十キロの袋を二・七個運ばなきゃ、これ一本も喫えねえぞ）
気軽にタバコを喫う気にもならない。

農民はつづける。

「刈取りと植付けは、半年に一回だ。後の半年は、賃金無しで暮さなきゃならん……」
「刈取りも請負制だ。貧乏人同士が値段の下げあいをして、仕事を奪いあう。自分の首をしめても、生きて行かねば……」

組合活動家が歴史的背景を説明する。

「サトウキビ農場は、封建的荘園制の遺制を未だに引きずっています。この島の五分の三がサトウキビ畑で、その全面積がわずか八つほどの家族によって所有されています」

「農場はその所有者の名前をつけて、××ハシェンダ（荘園）と呼ばれます。このハシェンダに住む土地を与えられて生活している農民が、サカダです。彼らはただ住むことを許されている、あるいは黙認されているだけの季節労働者です」

「住む土地を与えてやったのだから、無償で働け。これが、ハシェンデーロ（荘園主）の論理でした。また封建制のもとで、サカダた

編集後記

ちもそう考えることに慣らされてしましました。彼らは、与えられた土地に野菜を作り、ヤシを植え自給自足の生活に甘んじていました」

「もともと俺たちの土地じゃねえからね。前の地主が死んで息子の代になつたら、何十年そこに住んでたかもお構いなしに、俺たちを追いつしやる……」

「賃金を貰わにや、生きていけん。貰う賃金は雀の涙だ」

「マルコス大統領の戒厳令によつて、賃金の引き上げを求めるストライキ、デモ等は禁止されています。しかも、砂糖の世界市場での競争力をつけるため、大統領命令によつて、砂糖の輸出価格が突然切り下げられるということがあります。これが農場主たちに賃金据え置きの絶好の口実となります」

「有名な話さ……昨夜、大統領から長距離電話が入った。彼は、輸出価格を十%切り下げるといつている……」

「だから、俺たちの賃金は上げられねえ、というわけだ」

ザーツと降り続く雨の音に時おり消されながら、農民たちの話は深夜まで続いていた。

(つづく)

「水牛」が雑誌として出発してからはやくも第2号をおとどけする時がきました。書く、作る、売るのは作業は少人数の編集委員にはかなりきびしいことです。それでも、何通かずつ送られてきている予約購読の申込みにはげまされて、いつか「水牛」の輪がひろがってゆくことに思いをはせています。誌面づくりにご協力ください。読者の視点からの熱いメッセージを期待しています。原稿等は一切お返しいたしませんのでご諒承ください。(J)

いろいろな場所です。「水牛通信」を読んでいるさまざまなひとを思いうかべながら2号をつくる作業をするのは楽しいことでした。下に購読の御案内がありますが、5部以上まとめて送るほうが送料はずっと安いのです。グループを組んで申し込んでくださるのもひとつの方法です。

1号に誤植がありました。15ページ上段の13行目、加藤儀一の『家畜文化史』……は、加茂儀一の誤りです。訂正しておわびします。

3号には、部落に伝わる守子唄や民話のほりおこし、天皇一家総登場の寸劇、ペトリカメラの保育所訪問記などを予定しています。(M)

購読の御案内

※本誌は書店にはおきません。毎号確実に入手されるためには編集部あて予約購読の申し込みをしてください。発刊と同時に直送します。

※申し込みと送金は郵便振替(口座名水牛編集委員会、口座番号東京四一九一七九二)または現金書留でお願いします。住所、氏名、電話番号、何号からということをお明記してください。

※購読料は送料とも一年分三〇〇〇円半年分一八〇〇円です。

水牛通信

第二巻第一号

一九八〇年二月十日発行

定価 二〇〇円

発行人 堀田正彦

発行所 水牛編集委員会

〒154東京都世田谷区新町2-15-3

八巻方

電話〇三(四二五)九六五八

振替口座東京四一九一七九二

印刷所 (株)トライプリントショップ